
記憶の断片

枚方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶の断片

【Nコード】

N1122A

【作者名】

枚方

【あらすじ】

平和だった日常に、突然現れた黒の組織…そのターゲットは、元組織の一員である灰原哀だった！その危機を救うため、コナンは組織と接触を試みるのだが…事件は悲しい方向に進んでしまう。

第一章：朝春の訪れ

春休み、まだ起きるには早い時間にコナンは目が覚めた。

カーテンを開けると、朝の柔らかい光が室内に明るく注ぎ込む。その光に、コナンは思わず目を覆った。

窓を開けてみる。心地良い春風が吹いて来た。風が近くに生えている木々に当たる。

それに答えるように、木々がざわざわと音を立てて鳴いている。春の臭いがした。

「ん…、起きるか。」

コナンは枕元に置いてある眼鏡をかけると、扉を開け、部屋を後にした。

「おはよう、コナン君！今日は早いね。」

朝の不快感を吹き飛ばしてくれる、蘭の挨拶。

本当は、工藤新一として挨拶を交したいのだが、まだ時間がかかりそうだ。

「おはよう！蘭ねえちゃん。おじさんは？」

「まだ寝てるわよ。昨日遅くまで飲んでたみたいだったから…」

蘭は台所で何かを作っている様だ。香ばしい臭いが辺りに広がって来る。

コナンはテーブルに座りながら、出来上がるのを待っていた。

「はい、朝御飯よ！」

「ありがとう、蘭ねえちゃん！」

蘭はテーブルに、トーストとコーヒーを運んで来てくれた。それを手に取る。温かい感触が皮膚を伝わって来た。

「いただきま〜す！」

そう言つと、コナンは持っていたトーストに口をつけた。

パリッという音と共に、焼きたてのパンの味が口いっぱい広がる。「どう？美味しい？」

「もちろんだよ！蘭ねえちゃんは食べないの？」

「今作ってるから、もう少ししたらね！」

そう言っていると、蘭は再び台所に向かってしまった。

（そうだ、今日は九時から公園でサッカーをする約束だったな…）

朝食を食べていたコナンは、急にサッカーの約束をしていた事を思い出した。

時刻は八時半になるうかという所だった。

朝食を口に運ぶスピードも、自然と速くなる。

ほんの五・六分で、コナンは朝食を食べ終えた。

「ごちそうさま！」

その後、手早く歯磨きを済ませると、台所に立っている蘭をよそに、コナンは足早に二階へ上がった。

今から全ての準備を整えなければならぬので、少し焦っていたのだ。

部屋に戻るとコナンは素早く着替えを済ませ、恐らく今日使うであろう、愛用のサッカーボールを探した。

いつもの置場所である、ベッドの下に手を伸ばす。

しかし、その手に触れる物は何も無く、伸ばした手は空を切った。

「あれ？まさか…」

コナンはしゃがんでベッドの下を覗いてみたが、思った通り何も無かった。

「マジかよ、こんな時に限って…」

立ち上がって部屋を見回してみるが、何処にも見当たらない。

「仕方ねえ、今日は手ぶらで行くか。」

そう決めたコナンは、足早に部屋を後にした。時刻は既に、八時四十分を回っていた。

一階に降りてきたコナンは、蘭に外出を伝えていない事を思い出した。黙って行けば、後できついお仕置きをされる事をコナンは十分に知っている。

「蘭ねえちゃん。僕これから公園に行つて来るね！」

相変わらず台所で作業をしている蘭に、コナンは少し離れた所から言った。

少しでも時間を節約するための作戦だった。

「分かったわ。気を付けてね！」

遠くの方から蘭の声が聞こえた。それを合図に、コナンは玄関に向かう。

「じゃ、行つて来ま〜す！」

コナンの声が、家の玄関に響いた。その音は反響し、蘭の耳にも届いた。

さつきよりも遠くの方から、いつてらっしやいという声が聞こえた。
(さて、灰原はどうしてるかな。)

玄関の外に出て、軽く背伸びをしながら、コナンは思った。

珍しい事に今日は、灰原も公園に行くと言っていたのだ。

すぐ隣の大きな家が、灰原と博士の家だ。

とても二人で住んでいるとは思えない程大きく、広い家である。

玄関の前に立ち、コナンは無気力に叫んだ。

「灰原〜、来てやったぞ。まだいるんだろ？」

しばらくして、玄関から一人の少女が出て来た。

赤みがかった茶髪に、色白な肌を持つ不思議な少女…、彼女が灰原哀だ。

「別に良いわよ…、わざわざ迎えに来なくても。」

突き放すように言葉を言い放つ、それがいつもの彼女である。

「んな事より、用意できたのか？」

構わず、コナンは話を切り出した。

灰原のペースに付き合っていると、日が暮れてしまう。

「良いのかしら？そんな口を聞いても。」

「はあ…？」

コナンは最初、灰原が寝惚けているものだと思っていた。しかし、それは違った。

「これがどうなっても良いのかしら？」

と、灰原が持っていたのは、コナンが無くしたと思っていたサッカーボールだった。

「あっ！お前、どうしてそれを？」

「あら、この前皆と遊んだ時に、貴方が公園に忘れて行っただよ。」
そう言えば、この前遊んだ時、帰りにサッカーボールを持っていた記憶が無い。

「分かったよ、俺が悪かった！」

「泣いて謝ったら許してあげても良いわよ？」

微笑を浮かべながら、彼女は言った。

そのサッカーボールは、蘭に買ってもらった物で、コナンにとっては凄く大切な物なのだ。

（くっそ、人の足元見やがって…。）

本当に泣いてやろうかとコナンが考えていると、灰原は割り込む様に言った。

「何てね…。はい、返すわ。こんな所で泣かれたら困るもの。」

ポンと蹴り上げられたサッカーボールは、そのままコナンの足元に落下した。

「誰が泣くかよ、サッカーボールの為なんかに！」

からかわれて苛立ったからなのか、それとも照れ隠しから来るものなのか。

良く分らないまま、コナンは声を張り上げていた。

「ふふ、それもそうね。じゃ行きましょう。」

そう言くと、二人は灰原の家を後にした。

（用意出来てんなら、早く出て来いよな…）

コナンは思った。心の中ではそう思っているにも、実際は嬉しい気持ちでいっぱいだった。

なぜなら、彼女の笑った顔を久しぶりに見る事が出来たからだ。

第一章：朝春の訪れ（後書き）

どうでしたか？何かほのぼのした話を書きたくなって来ました…。初投稿なんで、多目に見てやって下さい。これから暗い話になると思うと、参りますね。次回は公園にてお会いしましょう！それでは！

第二章：新たな鍵

外は快晴で、時折吹く温かい風が、二人に春の訪れを感じさせる。草木は生い茂り、街路の周りを隙間無く埋め尽くしていた。

その街路の真ん中を通るようにして、二人は歩を進めている。

「それにしても、どうして今日は公園行く気になったんだ？」

頭の後ろで両腕を組みながら歩いていたコナンは、ふいに訪ねる。

「あら、どうしてそんな事を聞くのかしら？」

灰原は、怪訝な顔をしてコナンの方を見る。

「いや、少し気になったからさ。何か変わった事あったんじゃないかねえかってな。」

少々困った表情で、コナンは答えた。

「でも、これを言ったら貴方はきつと驚くわよ…それでも良いの？」
頬に笑みを浮かべながら灰原は言った。

どんな話が飛び出すのか気が気で無かったが、大体の予想は付いていた。

「それで…その驚く話つてのは何だよ？」

話に興味を持ったコナンは、恐る恐る灰原に訪ねてみた。

「解毒剤、と言ったら驚くかしら？」

「げ、解毒剤だと!？」

自然と声が大きくなる。

毒薬を作った本人からその話を聞くのだから、当然である。

「まさか、解毒剤が完成したのか？」

徐々に心臓の鼓動が速まって来るのが自分でも分かった。

解毒剤で元の体に戻ったら、すぐにでも蘭に報告したかった。

「いいえ、でも鍵は手に入れたわ。」

鍵は手に入れた。言葉の意味がいまいち分からないコナンは、さらに問いたです。

「鍵は手に入れた?という事だ？」

「つまり、あと少しで完成するって事よ。試作品ではない、本物の解毒剤がね。」

この言葉は、コナンの胸に深く届いた。それと同時に、何としても彼女を守って行こうという気持ちが、心の中に沸々と溢れて来た。

彼女を失えば、工藤新一の存在も消える…。

蘭の悲しむ顔は、もう二度と見たくなかった。

「灰原、ありがとう！感謝するぜ。」

コナンは、自然と真剣な口調になる。

こんな気持ちで心から礼を言ったのは、久し振りだった。

「お礼なら、工藤新一の姿に戻ってから…ね？」

コナンの真剣な表情に少し照れながらも、灰原は素直な気持ちを伝えた。

『昔の記憶はもう引きずるな』

この、優しくて温かいコナンの言葉…それが、彼女を変えていた。

「ああ、約束する！必ず守ってやつからな。」

同じ境遇を辿った彼だからこそ分かり合える…

灰原は、A P T X 4 8 6 9 を飲んだ事を後悔してはいなかった。

やがて、目的地である米花公園が見えて来た。

「おっ！三人共来てるみたいだぜ？」

公園を眺めながらコナンは言った。

三人はブランコに並んで乗っており、退屈そうにして待っている。

「あっ！コナン君と哀ちゃんが来たわよ！」

歩美が、ブランコに乗ってうなだれている光彦と元太に呼び掛ける。

その言葉に反応して、二人はほぼ同時に顔を上げた。

「おう、コナン！灰原と一緒にか？」

元太が大きな声を上げて話し掛けて来た。

ふくよかで背も高く、小学四年生と言っても十分に通用する体格の少年である。

「二人共おはようございます！元気でしたか？」

光彦が、元太に続いて話す。

母親の性格が遺伝しているのか、しっかりした言葉遣いをしている少年である。

「おはよう、コナン君！哀ちゃん！」

歩美が嬉しそうな顔をして喋っている。パツチリした瞳に、透き通った声をした女の子である。

「で、今日は何をするんだ？」

空いているブランコに腰掛けながら、コナンは周りに訪ねる。それに合わせて、灰原もコナンの隣のブランコに腰を掛けた。

「おいおい、何で隣に座んだよ？」

「仕方無いでしょ？他に空いてないんだから……」

少なからず、コナンは隣に座った灰原の存在を意識していた。その様子を見ていた歩美は、コナンの注意を引くために、わざと大きな声で話し始めた。

「歩美、サッカーが良いなあ！皆はどう？」

この場合、コナンがその場を取り仕切る事になっている。

「サッカーはこの前しただろ？他で良いよな？」

歩美自身も、この前サッカーをした事は良く覚えていた。確実に断られるのも承知の上だ。

だが、歩美の作戦は無事に成功していたのだ。

今、コナンの興味は遊びに向かっている。その事実だけで満足だった。

「じゃ、歩美ちゃんの意見を踏まえた上で……鬼ごっこはどうだ？」

鬼ごっこなら、子供でも出来るだろうとコナンは考えた。

「うん、鬼ごっこで良いわよね！みんな？」

歩美とコナンの意見に反対する者はいなかった。

正確には、コナンでは無く、歩美の意見に反対が出来ないのである。

「よし、じゃあさつさと準備しようぜ！」

準備といっても、鬼を決めるだけの作業で時間はかからない。

五人はブランコから降りると、鬼を決める為、輪になる。

「せーの！ジャン、ケン、ポン！！」

結果は歩美、コナン、灰原が勝ち抜け。元太、光彦のどちらかが鬼をする事になった。

二人は、お互いの心を読む様に睨み合う。

五、六秒程の沈黙が流れた…。次の瞬間、二人は勝負に出た！

「せーの！最初はグー、ジャンケンポン！！」

結果は、チョキを出した光彦の負けだった。

その瞬間、元太は拳を握り締め、勝ち誇った表情になっていた。

「鬼は光彦だぞ、みんな逃げろー！」

元太の言葉を聞くと、あつと言う間に四人は各所に散らばった。

光彦は、走って逃げる四人をただ呆然と見つめていた。

「あつ！ずるいですよ、フライングなんて…。じゃあ、行きますよ！」

ふつと我に返ると、光彦はすぐに皆を追いかけて走り始めた。

しかし、その仕草に気付く者は無く、四人はダッシュで逃げ続けた。

第二章：新たな鍵（後書き）

どうでしょうか？これで一週間費やして書いたとバレたら、友人に放り投げられるでしょう…秘密にしておいて下さい。次はいよいよ驚きの展開が！？コナンが組織に…おっと！この先はお楽しみで！！皆様の感想どんどん募集しています。それでは、さらば！（作者逃走）

第三章：組織との接近

コナン達が公園に来てから、既に二時間が経過していた。時刻は、午前十一時を回った所だ。

この時間になると、ここ米花公園は賑やかになって来る。

子供連れの家族や、グループになって遊んでいる子供達で公園は活気付いている。

五人は、その様子をベンチに座って離れた所から眺めていた。

「いけない！もうこんな時間…。」

ふいに歩美が、驚いた様な顔で言った。

「どうした？歩美ちゃん。」

隣に座っていたコナンが歩美に問い掛ける。

他の三人も、その会話を黙って聞いている。

「あのね、お母さんが門限は十一時まで言ってたの。ごめんね！」

これを聞いて、ようやく元太が話し始めた。

「何だよ歩美、もう帰っちまうのか？」

露骨に嫌な顔をしている元太を見て、光彦が止めに入る。

「まあまあ元太君、歩美ちゃんには歩美ちゃんの都合という物があるんですから。」

元太は何かを言いたそうな顔をしていたが、光彦の言葉に渋々納得したようだ。

「大丈夫よ！また明日遊ぼう！皆は遊べる？」

それに対し、今度は光彦が真っ先に答える。

「ええ、僕は大丈夫ですよ！元太君は予定あるんですか？」

「別に何もねえぞ。遊んでねえと毎日毎日暇で死にそうだからさ…。」

溜め息混じりに元太は言った。

二人は暇であると感じた歩美は、コナンと灰原に聞いてみる事にした。

「ねえ、コナン君と哀ちゃんは明日遊べる？」

歩美が淋しそうな顔をして二人に訪ねる。

コナンと灰原は、歩美の思っている事を即座に感じ取った。彼女の不安そうな顔を見れば、その様子がはつきり分かる。

「ああ、約束する。また明日来てやるぜ！なっ、灰原？」

「ええ、もちろんよ。だからそんな淋しそうな顔しなくても良いのよ？」

灰原の優しい言葉に、歩美はいつもの笑顔に戻っていた。

「うん！ありがとう！哀ちゃん、コナン君！」

嬉しそうに返事をする、歩美はベンチから立ち上がり、急いで公園の出口に向かった。

「みんなー！また明日会おうね！」

歩美は途中で後ろを振り返ると、大きく手を振りながら挨拶をして帰って行った。

歩美の帰りを見送った四人は、この後どうするかについて話し合う事にした。

「さて、どうする？俺達も家に帰るか？」

コナンは、ベンチから静かに立ち上がると、周りに訪ねた。

「そうだな。俺、母ちゃんの手伝いしなきゃなんないし……」

「僕も午後から塾があるので……、お先に失礼しますね。」

どうやら二人とも、午後から予定がある事を隠していた様だった。

「じゃあな光彦、元太！時間は、また明日連絡すつからよ。」

コナンから連絡を受ける事を聞いて、光彦と元太はほぼ同時にベンチから立ち上がる。

「じゃあな、コナン！明日遅刻すんなよ！」

「二人とも、また明日会いましょう。」

そう言つと、二人は公園の出口に向かって走って行った。

コナンと灰原は、二人が公園を出て行く姿を静かに見送った。

「さて、それじゃあ俺達も帰るか？」

軽く背伸びをしながらコナンは言った。

「ええ、もうここに用は無いわね。」

灰原は、ゆっくり立ち上がると、コナンを連れて米花公園を後にした。

帰り道の町並みは、二人が朝に通った時と少しだけ違っていた。

「それにしても、随分人通りが減ったんじゃないかしら？」

辺りを見回しながら、灰原は言った。

「ああ、この辺りは交通の関係で昼になると人通りが減るんだよ。知らなかったのか？」

コナンは何気無く言ったのだが、段々灰原が可哀想に思えて来ていた。

（悪い…、少し無神経な事言っちゃったな。）

口に出しては、とてもでは無いが言えなかった。

いくら解毒剤を作る為とはいえ、近所の様子すら把握していない…。

それに比べて、自分はのんびり完成を待っただけ。

いざと言う時、守ってやる事しか出来ない…。

「ええ、でも私は外に出なくても平気よ。貴方が小さくなったのは私の責任でもあるんだし…」

灰原は、こんな目に合っても自分のために必死になってくれている。こんな小さな体で、頑張っている。

これまでの自分と、一体何が違うだろうか？

同じ毒薬を飲み、同じ組織に追われ、二人で必死に戦って来た…。今考えれば、薬を作ったかどうかの違いだけ。

そんな自分に、やり場の無い苛立ちが生まれる。

「悪い、今まで気付いてやれなくて…。」

「ねえ、ちょっと…どうしたの？」

灰原は、心配そうな顔をして見ている。

「お前が、こんなに頑張ってたなんてな…」

「そんな事…、別に良いわよ。気にしないで。」

柔らかい笑みを浮かべながら灰原は言った。

「こうして貴方と一緒にいられる…、それだけで十分よ。」

普段は闇に隠れて見えないが、灰原はとても優しい心を持っていた。コナン自身、こんなに優しい灰原を見たのは初めてだった。

（灰原…、それが本当のお前だな。）

皆に冷たく接していたのも、心配をかけまいとしていたからだだった。と、コナンは悟った。

やがて、博士の家が見えて来たのだが、いつもと様子が違っていた。

「お…、おい灰原、あれ見ろよ…。」

コナンは、その異様な光景に素早く気付いた。

家の玄関の前に、見知らぬ黒い車が停まっているのが目に入った。

その光景に、コナンは思わず言葉を濁す。

「えっ…？」

そして、灰原もその異変に気付いた。

黒い衣を身に纏った人間が、博士の家の玄関にいたのだ。

「まさか…ね…？」

灰原の脳裏に、最悪の考えが浮かんでいた。

第三章：組織との接近（後書き）

いかがでしたか？果たしてこの先二人はどうなってしまった！と
気になる人も希にいますでしょう。しかしタイトルが「組織との接近」
ということは……推理しよう。感想どんどん募集中です！次回は、
ついに黒の組織と接触しますよ！お楽しみに！（作者逃走）

第四章：接触。そして運命は…

コナンは灰原の手を引くと、近くの物陰に素早く身を潜めた。

灰原も、この只ならぬ雰囲気にならず戸惑っている様子だった。

「ねえ、江戸川君…」

灰原が小さな声で訪ねて来た。

「ああ…、まずい事になったな」

次第に心臓の鼓動が高鳴って来る。

なぜ組織の手がここまで及んで来たのか、全く分からなかった。

この状況から分かることは、博士の家に組織の一員がいる事。

そして、博士が人質に取られている事だけだ。

玄関に怪しい人物がいるのに、博士が警察に通報しないわけが無い。

博士が人質に取られていると考えれば、皮肉にも全てのつじつまが合う。

「博士…」

灰原は、今にも消えてしまいそうな声だった。

灰原にとって、博士の存在は余程大きくなっていたのだろう。

もしかすると、博士の事を本当の家族の様に思っていたのかもしれない。

「灰原…心配すんな！俺に任せろ。」

その様子を見ていたコナンは、静かに呟いた。

こんなに悲しそうな表情の灰原を、これ以上見ていられなかった。

「えっ…？」

灰原は、下げていた頭を上げると真っ直ぐコナンの方を見た。

お互いの視線が、ぴったり合う。

それを見て、恥ずかしさからかコナンはさつと顔をそらす。

そして、視線を合わせない様に下を向きながらこう言った。

「俺が、奴と接触するんだよ。」

コナンは、何の躊躇もせずに言い放つ。

心配そうな表情の灰原を見て、更にコナンは言葉を続けた。

「大丈夫！必ず戻って来っから心配すんな。」

灰原には、コナンが何をしようとしているのか直ぐに分かった。

そっ…、自分を犠牲にして博士を救おうとしているのだ。

警察を介入出来ないこの状況では、そうせざるを得なかった。

「あなた…、死ぬかもしれないのよ？なのに…どうして…」

灰原は、もうコナンに何を言っても無駄だという事を悟った。

何故、他人を守るため自分の身を投げ出すような真似が出来るのか。

「何言ってるんだよ。約束したろ？お前を必ず守ってやるってな！」

その答えは、今のコナンの言葉を聞いてすぐに分かった。

彼は、他人の事を一番に考える事の出来る人なんだと知った。

その優しさは、今の灰原に欠けている物だったのかもしれない。

「…絶対、戻って来てくれるわよね…？」

今にも泣き出してしまいそうな感情を、必死に押さえて言った。

「ああ、必ず戻る！」

それは周囲に聞こえない程の小さな声だったが、灰原の心にはとても大きく響いた。

「俺は、奴らを家の中から誘い出して、出来るだけ遠くに行く。お前はここで様子を見てろ。」

コナンは、口を休める事無く次々と言葉を発して行った。

その表情には、もう迷いは無かった。

「じゃあな…灰原。」

そして、コナンは物陰から身を出し、ゆっくりと男の元に向かって歩いて行った。

灰原は、コナンの後ろ姿をとて悲しそうな表情で見守っていた。そう、コナンが無事に戻って来てくれる事だけを信じて…。

「江戸川君：大丈夫。私が何とかするから…。」

コナンの背中を見ながらそっと呟く。

これが、本当に精一杯の言葉だった。

一方コナンは、もうすぐ博士の家の前に辿り着く所である。

玄関の前には、一人の男が何かを待っている様に立っていた。側には、一台の黒い車が停めてあった。

「ねえ、おじさん。ここで何してるの？」

コナンは男にゆっくり近付くと、なるべく怪しまれない様に話し掛けた。

「何だお前は、ここから消えろ！」

目深に被られた帽子で顔ははっきりしないが、男は黒の組織の特徴を良く捕えていた。

「僕、博士に用事頼まれてるんだ！ねえ、中に入れてよ！」

コナンは男に探りを入れる為、言葉が続けた。

「博士だと…？あのジジイについて何か知っているみたいだな。」

男は、コナンを睨むと冷たく言い放った。

本当に冷たく、殺気に満ちた目であった。

（こいつ…、博士の命を盾に俺を誘拐するつもりだな？）

コナンはそう推理したのだが、この状況を覆す策が見つからなかった。

本来なら警察に連絡するのだが、博士が人質に取られている今の状況では到底無理だ。

この麻酔銃とシューズを使っても相手は複数…目的の為なら博士をも殺しかねない。

それに、この男が仲間と常に通信しているかもしれない。

博士に危険が迫っている以上、男の指示に従うしか無かった。

「全く…、馬鹿なジジイだぜ。さっさと吐けばこのガキを誘拐せずに済んだものを…」

男はコナンの方を見ながら嘲笑う様に言った。

「何だと…てめえ、博士に何をしたんだ！」

コナンは恐ろしい程の形相で男を睨み付けた。

その表情は江戸川コナンでは無く、工藤新一そのものだった。

「ふん、お前に教える必要は無い…秘密を知られたからには、一緒に来てもらう！」

男はコナンの迫力に動じる事無く、淡々と話を続けた。

『秘密を知った者は、誰であろうと抹殺する』

これが、闇に生きる黒の組織の掟だった。

「分かった…その代わりに博士を解放しろ。」

コナンは冷静さを取り戻すと、男が出した条件に素直に従った。
いや、そうせざるを得なかったのである。

「ふん…良いだろう。だが…」

そう言うと、男はポケットから薬品の染み込んだガーゼを出した。

「お前には、しばらく眠っていてもらう。」

そして、コナンの口に素早くガーゼを当てる。

「うつ…何を…」

為す術も無く、コナンは地面に倒れ込んだ。

男は、動かなくなったコナンを抱え上げると、側にある車に乗った。
それに合わせて、博士の家からも二人の人間が出て来た。

上から下まで、黒一色の服を着ている男達だ。

そして、二人の男も別の車に乗り込み、阿笠宅を出ていった。

二台の車は家からどんどん遠ざかり、やがて見えなくなった。

そう、一人の高校生探偵と共に…。

第四章：接触。そして運命は…（後書き）

いや、投稿が遅い…何かと忙しくて…あの、すいません！さて、一言謝った後にまた話題を一つ。これを書くに当たって一番困ったのは、男とコナンのやりとりなんですよね！だってさ、矛盾が出ない様にするの大変だったんよ？しかも二時間かけた癖に、全然面白くないし…はあ、もっと上手になりたい。灰原の会話も何かしつくり来ないなあ！とにかく、次は灰原の行動がメイン（それしか無い）になっちゃいます。博士は無事なのか？男の正体は何なのか？そしてコナンの運命は？？などの様々な疑問がありますね。続きは次回以降を見て下せえ！それじゃ、またいつか！

第五章：全てを伝える時

コナンが連れ去られる少し前、灰原は忠告を無視して家の裏口に回り込んでいた。

博士の無事さえ確保すれば、コナンが組織に捕まる心配もなくなる。コナンの頼みでも、自分だけ安全な場所で見ている事は出来なかった。

「ここからなら、何とか入れそうね…。」

一ヶ所だけ低くなっていた家の塀を乗り越え、裏口に回り込む。そつと扉に耳を当て、室内の様子を確認した。

「兄貴、あのジジイどうするんですかい？」

「バラすのは、シェリーを捕まえてからだ。」

中から、聞き覚えのある男達の声が聞こえた。血も涙も無い、冷酷な悪魔の声だった。

（ジン！ウォッカ！）

灰原は思わずドアから耳を離した。

しかし、その話し声は薄い壁を通り抜け外まで漏れて来てしまう。

「でも、何で分かったんですかい？ここにシェリーがいるって…」

「なあに、俺はあいつの小さい頃の顔を知っているからな…町で見かけた時に尾行したただけだ。」

その瞬間、灰原は激しく悔んだ。

自分のせいで博士がこんなにも危険な目に合っている事を。

そして…、奴らは自分を殺す為に待っている事も分かった。

「さすが兄貴…、でもその時拐えば良かったんじゃないんですかい？」

「ふっ…、あの時は他の子供達と一緒に歩いていたんだな…合図だ、ウォッカ行くぞ。」

そして、ジンとウォッカが扉を開けて外に出て行く音が聞こえた。乱暴に扉を閉める音、重複する車のエンジン音が静けさを保ってい

る灰原の耳に届く。

（えっ…？狙いは私のはずなのに、なぜ奴らは外に出たの？）

灰原には、コナンが何か行動を起こしたとしか思えなかった。

（今ならまだ間に合うかもしれないわ！私が犠牲になれば…）

直感的にそう思い、急いであの車が停まっていた方向へ向かった。

しかし、車は既に遠く離れた後であった。

（まさか…、江戸川君もあの中に！？）

しかし、他に思い当たる節は無かった。

コナンの姿はどこにも無く、灰原は一人ポツンと立ち尽くしている状態である。

そう…、灰原が見たこの光景こそ、コナンが車で連れ去られた瞬間だったのである。

「はっ！…博士は？」

灰原はようやく博士の事を思い出した。

コナンを助ける事ばかりでは無く、博士の無事も同時に確認しなければならぬ。

今起きている事の重大さに気付くと、灰原は急いで家の中に入った。室内は荒らされた形跡も無く、ついさっきまで普通に生活していたかの様だった。

「博士ー！お願い、返事をして！！」

灰原は今までに無い程の大声で叫んだが、博士からの返事は無かった。

「…もしかして二階かもしれないわ！」

突然の出来事で気が動転していたが、博士の部屋は二階だ。

もし突然奴らが押し入って来たなら、当然二階にいた時に襲われたはず。

そんな簡単な事に気付かない程に、灰原の心は不安定だった。

「でも…、やっぱり信じられないわ。江戸川君が拐われたなんて…」
階段を登りながら、ぽつりと呟く。

今までどんな事件も解決して来たコナンが、突然遠くに行ったなん

て信じられなかった。

（博士…お願い、無事でいて。）

こうしている間にも、コナンがどんどん危険に晒されている。一刻も早く、博士の無事を確認して助けを求めたかった。

「博士、中にいるの？入るわよ！」

灰原は殆んど確認もせずに中へ入った。

そこで見たのは、仰向けにベッドで寝ている博士の姿だった。我を忘れ、一気に博士の元へ歩み寄る。

「はっ…博士？ねえ、目を開けて！」

灰原は、博士の大きな体を力一杯揺さぶった。

しかし、小さな子供の力で大人の体を動かせるはずも無かった。

「くっ…、博士…！」

灰原は、限界まで大きな声を張り上げ、必死に呼び掛けた。

「んっ…、ここは…」

灰原の必死な呼び掛けに答えるかの様に、博士は目を覚ました。

「博士！大丈夫なの？」

灰原は、少しほっとした顔に戻った後、静かに訪ねた。

「おお、哀君！どうしたんじゃ？」

博士は、怪訝な顔で灰原を見た。

「何のんきな事言ってるのよ！さっきまでジンとウォッカに拘束されてたのに覚えて無いの！？」

灰原は再び声を荒げて博士に詰め寄った。

「またまた…、第一こんな所に組織が来るわけないじゃろ？」

灰原の必死な表情にも関わらず、博士はまだ半信半疑な様子だった。

「だったら、江戸川君がいなくなったのはどう説明するのよ！？」

灰原は更に声を大きくして言った。

コナンが拐われた事のショックで、いつもの冷静さを失ってしまったていたのだ。

「ごめんなさい…、でも本当の事なの。」

灰原は、博士の事も考えずに声を荒げてしまった事を素直に詫びた。

「わしの方こそ…信じなくて悪かったよ。それよりもっと詳しく教えてくれんか？」

そして灰原は、今まで起きた出来事を包み隠さず全て伝えた。過去に尾行されていたせいで家がばれた事。

コナンが組織の奴らに拐われた事。

組織の目的が自分を殺す為だった事など、全てを話した。

「どう…、信じられなくてもこれが真実なの。」

それだけ言つと、灰原は窓から外を見た。

雲一つ無く、本当に綺麗な空であった。

「…まさか、本当に新一君が…？」

博士も、今起きている事の重大さに驚いている様子だった。

「そうよ…。でも不思議ね…どうして博士は何も覚えて無いの？」

灰原は、部屋に視線を戻すと博士に訪ねた。

「それが…、何故か事件があつた時の記憶だけ思い出せんのじゃ…」

どうやら、事件前後の記憶だけが綺麗に抜けているらしい。

「組織は何を考えているのかしら…？とにかく、一刻も早く警察に連絡しましょう！」

そう言つと、灰原は部屋の机から素早く携帯電話を持って来た。

「ありがとう、哀君。」

灰原から受話器を受け取ると、博士はゆっくり間違えない様に、電話番号を入力した。

番号を押し終え、無機質な呼び出し音が電話口から響く。

「はい、こちら警察ですが。」

電話に出たのは、幸運にも目暮警部だった。

「あ、阿笠です。実は大変な事になりました…」

そして博士は、今回起こつた事件を伝えた。

コナンが見知らぬ男に誘拐された事。

家の中で、仲間の男達に監禁されていた事。

しかし、それが組織の仕業である事や、灰原を殺すのが目的であった事は当然言わなかった。

しかし、コナンを助ける為には、いずれ言う事になるかもしれない。
運命の齒車は、刻一刻と動き始めていた…。

第五章：全てを伝える時（後書き）

終わったー！五章も無事に出来た…。まさかここまで続くなんて思わなかったよ（おい！）家にいたのはジンとウォツカだった…。しかも博士は事件の記憶が全く無い。これも計算の内だ（本当か？）次回はどうしようか、まだ考えてない。多分警察が…っと、ネタバレになるから秘密！果たしてコナンは無事に戻って来るのか？そして組織の本当の目的とは？気になる方は次回を見なさい。それじゃ、ここまで読んでくれてありがとうございました！また、いつの日か。（多分一週間以内）

第六章：事件を知った二人の行動。

博士は、ついに事件の事を警察に言った。

多少偽りもあるが、それは危険を避ける為に仕方の無い事である。

そして、事件の概要を聞いた目暮警部は、静かに口を開いた。

「阿笠さん、とにかく落ち着いて下さい。…毛利君は、まだ事件の事を知らないのですね？」

目暮警部は、少し考えた後、なるべく冷静を装い博士に訪ねた。

「ええ…恐らく、知らんでしょう…。」

博士は、うつ向きながら小さな声で呟いた。

「そうですね…では、私と毛利君の二人で、今から阿笠さんの家へ向かいます。」

目暮警部は、さっきよりも自信に満ちた声で説明をした。

「すいません…、何から何まで警部に任せてしまいました…。」

「阿笠さん、何を言ってるんですか？あなた達民間人の不安、悩みを解決する事が我々警察の仕事なんですよ。」

目暮警部は、博士の言葉を遮る様にして言った。

周りから見れば冷たく聞こえるかもしれないが、目暮警部なりの励ましの方法だった。

「分かりました。ありがとうございます！」

それでも、目暮警部の無器用さを知っていた博士には、その暖かい言葉がしつかり届いていた。

「いいえ、それでは失礼しますよ。」

そして、目暮警部との連絡は途絶えた。

電話口からは、規則的に続く電子音が聞こえて来ている。

それを確認し、阿笠博士もゆっくりと終話ボタンを押した。

「ねえ、目暮警部は何て言ってたの？」

博士の後ろから、心配そうな顔をした灰原が声を掛けた。

「おお！今から来るそうじゃよ。心配するなと言っておったぞ。」

博士は、灰原を元氣付ける為に出来るだけ明るく話し掛けた。

「そう、とりあえず安心出来るわね…。」

しかし、その言葉とは裏腹に、灰原の表情には元氣が無かった。

「どうしたんじゃ？そんな浮かない顔して…。」

博士は、俯いている灰原を見て心配になり、思わずしゃがんで訪ねた。

「…いえ、江戸川君が心配だったから。」

そう言うと、灰原は振り返って窓の外を向いた。

「でも、落ち込んでばかりはいられないわね…ごめんなさい。」

震えた声で、必死に泣きたいのを堪えている様子が博士には分かった。

「謝らなくてもいいんじゃないよ。なに、新一の事だからもう脱出してるかもしれないのう。」

博士の言葉にも、灰原は反応を示さなかった。

ただ物憂げに、窓から通りを見下ろしていた。

「ねえ…、博士。」

沈黙が少し続いた後、灰原は静かに口を開いた。

「んっ、どうしたんじゃ哀君？」

博士は、驚いた様子で灰原の方を見た。

灰原は、そっと部屋に視線を戻すと、博士の目を見ながらこう言った。

「もし必要なら、組織の事や薬の事…。それに私達の正体を、警察に話しても良い？」

今の状態では、あまりにも警察に伝える情報が少なすぎる。

ここで警察に組織の情報を話せば、警視庁一丸となって捜査してくれる事は間違い無い。

だが、組織の事や薬の事を漏らせば、蘭や服部にも危害が及ぶ。

二人に取っては、正に苦渋の選択だった。

「…仕方無いのう。ただし、警察には哀君の口から言っんじゃないぞ。」
「ええ。」

灰原の表情は、いつものポーカーフェイスに戻っていた。

それから二人は、口を固く閉ざしたまま、一言も喋らなかった。部屋には、時を刻む針の音だけが流れている。

一分が一時間にも感じられる程の、長い長い沈黙が流れた。

（ピンポーン！）

次の瞬間、いきなり玄関の呼び鈴が鳴った。

それに驚き、博士と灰原は顔を見合わせる。

「あら、目暮警部の登場みたいよ？」

「そうじゃな。一階に行かねばならんのう。」

二人は、ほぼ同時に歩き出すと、二階の部屋を後にした。

（ピンポーン！）

一階への階段を降りている途中で、再び玄関の呼び鈴が鳴った。

「目暮ですが、中にいますでしょうか？」

それは、紛れもなく目暮警部の声だった。

博士は素早く扉の前に駆け寄り、しっかりとノブに手を掛けた。

ギィィィ、という音と共に扉がゆっくり開く。

「おお、目暮警部。待ってましたよ！」

玄関先には、連絡を受けていた目暮警部と、事件の当事者である毛利小五郎が立っていた。

「阿笠さん！コナンが拐われたというのは本当なんですか！？」

そう言うと、小五郎はいきなり博士の肩に掴み掛かった。

「ほ、本当じゃよ……！紛れもない事実で……。」

博士は、一瞬その突飛な行動に驚いたが、抵抗する事は無かった。

「あんたがいながら……コナンはもう戻らないかもしれないんだぞ……？」

小五郎は、更に力を込めて博士の肩を掴んだ。

「し、仕方無いじゃないか……。何も出来なかったんじゃから……。」

小五郎の尋常では無い様子を前に、博士は弱々しい口調で答えた。

「何も出来ないって……てめえ！そんな言い訳で許すと思ってんのか……！」

小五郎は、拳を振り上げ今にも博士を殴り飛ばしそうな剣幕だった。

「毛利君！！辛いのは分かるが、やめるんだ…」

目暮警部は、喉から絞り出す様な声で小五郎を止めに入る。

「しかし、警部殿…」

まだ肩を掴みながら、小五郎は目線を目暮警部の方に移す。

「ここで阿笠さんを殴っても、何の解決にもならないんだ。その事を良く考えてみる…」

そう話す目暮警部の表情には、普段見せない様な気迫が漂っていた。

「…警部、阿笠さん…さっきはどうもすみませんでした。」

小五郎は博士の肩から手を放すと、深く頭を下げて謝った。

「毛利さん…別に良いですよ。さあ、早く中に入って下さい。」

そう言うと、博士は二人を室内に招き入れた。

そのまま部屋のあるソファーに、二人は深く腰を掛ける。

「さて…毛利君に確認させる意味も込めて、もう一度詳しく事件の事を話してくれますかな？」

小さな溜め息を一つ付いた後、目暮警部は静かに言った。

「はい。」

そして、博士は慎重に言葉を選びながら、再び事件の事を話し始めた。

第六章：事件を知った二人の行動。（後書き）

毛利さん：殴っちゃいかんよっ！博士だって辛いんだってば。でも、さすが目暮警部！持ち前の迫力で止めちゃった（何で解説してんだ？）何か、前回に比べてあんま話が進んで無いような、そんな気がする…。文章力が、まだ無いつつの！大体第一章の話が一番面白くないか！（自分的に）段々フレッシュさが消えて来たね。こんな作者ですが、次回もどうぞ見て下さいまし。それではさようなら！

第七章：それぞれの動き

博士は、気を使いながら二人より少し遅れて椅子に座る。

そして、事件の経緯を二人に話し始めた。

「実は、私が二階で過ごしていると、突然二人組の男が入って来て、変な薬を嗅がされ気絶してしまっただんです。」

二人は、ぐぐつと身を乗り出して博士の話を聞いている。

「そして、ふと気が付いた時は、ここにいる哀君に起こされていたというわけじゃよ……」

それを聞き終えると、今度は目暮警部が質問を投げ掛けた。

「では、君はコナン君がどうしていなくなっただか知っているかね？」
軽く咳払いをすると、目暮警部は言った。

「ええ…博士、本当に良いのよね？」

それに答える様に、博士は小さく頷く。

口元をぎゅつと噛み締めた後、灰原は核心となる部分を話し始めた。

「目暮警部、実は今回の事件…黒の組織と言う奴らの仕業なんです。」

「

ついに、灰原の口から黒の組織と言う言葉が飛び出した。

重苦しい空気が、辺りを包み込む。

「なぜ、子供の君がそんな事を…。組織とは、一体何なんだね？」

沈黙の中、目暮警部は一人言葉を返す。

「私も詳しくは知らないけど…、ある薬を研究しているらしいの。」

灰原の嘘とも思えぬその表情に、三人は言葉が見付からなかった。

「それで…君は、その組織と少なからず関係があるのかね？」

目暮警部は、恐る恐る灰原に訪ねた。

「まだ分からない？私も組織の元で薬の研究をしていたのよ。」

灰原の、酷く冷たい表情に目暮警部は暫く困惑していた。

「私より、阿笠博士に説明してもらった方が断然早いわ。」

二人は、そつと阿笠博士に視線を戻す。

「哀君の言った事は全て本当です、どうか信じてもらえませんか？」
毅然とした態度で、博士は強く言った。

普段とは、全く違う真剣な目つきである。

「目暮警部…、探偵の私でも黒の組織なんて知らないっすよ？」

小五郎は、小さな声で目暮警部に問い掛ける。

「いや、どうも私には嘘を付いているようには見えないのだ…警部の勘というものだ。」

その言葉に、小五郎はしばらく考える様な素振りを見せる。

確かに、ここで嘘を付いても灰原や博士には何の得も無い。

現に、コナンは組織の手によって消えている。

それに、この二人が嘘を付くはずが無い。

目暮警部は、そう考えた上で嘘では無いと見抜いたのだ。

「確かにそうですね、分かりました。お二人の言葉を信じましょう！」

小五郎は、何かを決めた様な表情で言った。

「私も信じてますぞ、阿笠さん！」

目暮警部が、少し遅れて言葉を放つ。

今、四人の気持ちがよくやく一つになった。

「その言葉は…私じゃなく、宮野君にお願い出来ますか？」

博士は、一ヶ所だけ訂正を加えた。

宮野、と言う言葉に、二人は少しの間だけ困惑していた。

この部屋でそれに当てはまる人物は、たった一人しかない。

「そう…私の本名は、宮野志保よ。」

三人が見つめる中、灰原は静かにその言葉を切り出した。

既に小学生の雰囲気は消え、大人っぽさが全面に現れている。

「君は、志保…さんと言うのかな？じゃあ、灰原というのは…」

「偽名よ。博士に助けてもらえなかったら…私は組織によって消されていたでしょうね。」

ふっ、と自嘲するかの様に灰原は言う。

「それで君は、阿笠さんの所で灰原哀と名乗りながら、生活してい

たというわけか…」

改めて、これが疑いよう無い真実だと、警部は納得していた。

「まあ、そんな所よ。信じてくれたかしら？」

安堵からか、灰原はふつと笑みを浮かべる。

「ああ！もう疑う余地は無い。組織壊滅に協力してやるぞ！」

右手を前に差し出しながら、目暮警部は自信に満ちた声で言った。

無言のまま、灰原はその大きな手を握る。

「ほら、毛利君も早くしないか！」

目暮警部は、呆然と見ている小五郎を急かす。

「あつ、いや、一緒に頑張りましょう！」

少し慌てた後に、小五郎はいつになく真面目な顔で言った。

「はい！どうもありがとうございます！」

阿笠博士は、笑顔で握手を交わした。

「では、私達警察はコナン君を探す。もちろん毛利君も一緒にな。」

目暮警部は、これからの行動について簡単な説明をしている。

もちろん、四人が協力して考えたのだから、誰も反対者はいない。

それぞれが、重要な仕事を任されていた。

「阿笠さんと、それに志保さん…は、また危険な目に合わない為に、コナン君の帰りを待っていてあげて下さい。」

二人は、再度納得するように小さく頷いた。

「では…私達はこれで失礼します。後はお任せ下さい。」

「何かあったら、いつでも連絡を！」

二人は、軽く挨拶をするとそのまま阿笠宅を出て行った。

灰原と博士は、二人の立ち去る姿を玄関口から静かに見送った。

「博士…これで良かったのよね。」

「おそらく、これで良いんじゃないよ。」

二人の疲労は、既に頂点へと達していた。

明らかに元気が無くなっている様子が、互いにはっきりと分かる。

（本当に、これで良かったの？）

疲れていて、何も考えたくないはずだった。

しかし、灰原は様々な考えを巡らせる。

自分だけの力で、何とか出来たんじゃないかと思った。

もしかしたら、悪い夢を見ているんじゃないかとも思った。

しかし、それはあまりにも儚い考え。

組織という名の、大きな城壁の前では、灰原の苦悩など無意味だった。

「今日は、もう夜になったみたいじゃし…そろそろ寝ようか？」

いつの間にか、時刻は九時を過ぎている。

「そうね…、何だか今日は疲れたわ。」

灰原も時計を見て、ようやく夜になっている事に気が付く。

夕御飯も食わずに、二人はそれぞれ寝る為の身支度を始めた。

（明日から、本当の戦いが始まるのね…。）

コナンは、結局夜になっても帰らないまま。

灰原は、改めて置かれている事態を深刻に受け止める事となった。

やがて二人は、それぞれの思いを馳せながら眠りに付いた。

長い夜は、いつもと変わらない夜明けに移り行く事だろう…。

第七章：それぞれの動き（後書き）

後書きという名を借りて謝ります…全然面白くなってすみませんっ！たぶん次話あたりから展開するのかなーと…曖昧に考えたり。ついに警察に伝えちまったね、しかし簡単に信じ過ぎだよな？なんて疑問はどっかに捨てて下さい！目暮警部が博士をよつぽど信賴してるって事に…。さて、無理に次話の予告をするなら『葛藤』かな？誰の葛藤なのかはよく読めば分かるはず…それじゃ！感想募集中ですな。

第八章：終焉と開闢

“コナン君！お願いだから目を開けて！”

蘭は、泣きながら必死にコナンの名を叫ぶ。

“残念ですが…運ばれた時には、もう…”

蘭の隣で、医者が顔をしかめながら言った。

コナンの体には脈を計る為の心電計が付けられていたが、医者はゆっくりとそれを剥がす。

コナンの顔は青白く変色しており、完全に血の気が引いていた。

“コナン！死ぬなんてらしくねえぞ！”

“コナン君が死んでしまったら、少年探偵団はどうなるんですか！”

“そうだよ！お願いだから目を開けてっ！”

元太、光彦、歩美らが必死で呼び掛けたにも関わらず、コナンが反応する事は二度と無かった。

“江戸川君…嘘よ、冗談でしょ？あなたが死ぬなんて事…”

灰原はその様子を直視出来ずに、ただ呆然と立ち尽くしている。

こんなに悲しいのに、涙も出なかった。

灰原には、コナンがベッドから起きて、また得意の推理を披露してくれる気がしていた。

しかし、それは絶対に叶わない事である。

何故なら、コナンは死んでしまったから。

あの日の夜、警察から連絡があった。

内容は、搜索の甲斐あって、コナンを見つけたというものだった。

勿論、灰原も博士も心の底から喜んだ。

“それが…瀕死の重症を負ってしまって、助かるかどうか…”

しかし、喜びを遮って出されたその言葉は、二人に取ってあまりにも残酷だった。

その後すぐに指定された病院に来てみたが、既に遅かった。そう、既にコナンは亡くなっていたのだ。

ベッドの周りは、コナンの死を悲しむ人々でいっぱいだった。

平次、蘭、小五郎、少年探偵団と…本当に沢山の人が集まっている。そんな中、灰原だけはコナンの顔をまともに見れなかった。

ただ部屋の隅で、訳もなく立ち尽くしている。

(…どうやら、私の役目は終わったみたいね…)

まるで、魂の抜けた人形の様だった。

『…君、…哀君!』

その時、突然誰かの声が灰原の耳に届いた。

脳へ直接語り掛けて来るような声が、どこからか響いて来る。

(誰!? 一体どこにいるの? 頭が痛い…)

我慢出来ずに、その場へ座り込んでしまう。

そして、徐々に視界が閉ざされて行った。

「哀君! しつかりするんじゃない! 哀君!」

同じ人物の声が、さっきより大きく聞こえた。

(えっ……?)

灰原は、まだ状況が理解出来ずにいる。

ゆっくり目を開くと、側には必死な顔をした阿笠博士が立っていた。

「哀君!?? どうしたんじゃない? 一体…。」

博士は、とても驚いた様子で灰原に訪ねる。

「博士…、どうしてここにいるの?」

ベッドから急いで起き上がると、灰原は怪訝な顔をして言った。

「ここは病院でしょ? それに、たった今…。」

灰原には、何が何だか分からなかった。

一瞬で、病院から見知らぬ部屋に移動してしまったのだ。

「何を言っんじゃない。ここはワシの家じゃぞ?」

その言葉に、灰原は慌てて室内を見渡す。

確かに、ここは紛れもなく博士の家だった。

昨日のまま、部屋の風景は変わっていない。

「……………」

この状況を前に、灰原は言葉が出なかった。

「博士、私はずっと家にいたの…？」

状況を飲み込めて来た灰原は、改めて博士に確認する。

「勿論。哀君は今までうなされていたからの。」

博士は、優しく言い聞かせる様に話す。

（じゃあ…江戸川君が死んだのは、夢…。）

この答えは、灰原に相当な驚きを与えた。

何故なら、あの風景があまりにも生々しく、気持ち悪かったから。

コナンの、青白く変色した皮膚や、既に冷たくなっていた手…。

痩せた顔や、周りの人々の反応。

思い出すだけで、背筋に寒気が走った。

「…私は今まで、夢を見ていたようね…。」

やがて灰原は、静かに語り始めた。

博士は黙ってその様子を見つめている。

「江戸川君が死んでしまって…私と博士は、死に目に会えなかった。」

「

灰原は夢の内容を思い出しながら、ゆっくりと博士に話す。

悲しそうな表情で、それでも話を続ける。

「そうじゃったか…、辛かったのう。」

博士も、かなり暗い表情になっていた。

これが現実だったらと思うと、寒気が走る。

今は黙して、警察からの連絡を待つだけだった。

「もう九時だから、そろそろ起きるわね。」

「じゃあ、ワシは下に行つとるぞ。」

灰原は、いつも通りにカーテンを開け、身支度を済ませるとすぐに

一階へ向かった。

そのまま何事も無く、一日が過ぎた。

結局、この日もコナンは見付からず、また無機質な一日を過ごしてしまった。

しかし、転機が訪れたのは二日目の事である。
それは、一本の電話から始まった。

「えっ！？コナンが…はい、分かりました！」

博士の大きな声が、家の中で反響する。

「どうしたの？博士！」

灰原も、博士の驚き様を前に冷静ではいられなかった。

「警察からじゃ！コナンが見付かったと…」

博士は、驚きにも似た表情を浮かべて言う。

「何ですって！？」

待ちに待った時は、突然に訪れた。

第八章：終焉と開闢（後書き）

…夢かよっ！！何じゃこの展開は。実は作者である自分が、体験した事を元に話を進めました…こんな事って、たまにありますよね？夢から現実に戻る時に、記憶が混乱する事！まさにそれを真似た（又はパクったとも言える？）まあ、今更遅いしな！これっぽっちも他人のアイディアは真似してませんので、あしからず。次はどうなるか？まだ未定なんですよ。それじゃ、また次回お会いしましょう！

第九章：夢と現実の違い

電話の相手は、目暮警部の部下だった。

冷静な声で、コナンが見付かった事を淡々と説明している。

家の周囲からは、車の騒音や物音など、一切聞こえて来ていない。ただ、電話の応答をする博士の声だけが、室内に響いていた。

『…と言うわけです。後は目暮警部が説明をしてくれるでしょう。』
「分かりました。では今から向かいます。」

そう言いつと、博士は慌ただしく電話を切った。

一度大きな溜め息を付くと、灰原の方を向いて静かに口を開いた。

「哀君…、今から病院へ向かうぞ。」

嬉しいはずなのに、博士はどこか浮かない顔をしていた。

「博士…、何か様子が変だけど…？」

その様子を素早く察知したのか、灰原は怪訝そうな顔をして訪ねる。
「いやいや…あんまり突然の事だったんで、驚いただけじゃよ。」
やはり、博士は何かを隠しているようだ。

普通の出来事なら、多少喜ばはずなのに、全く感情を出していない。
「じゃあ、ワシは準備をして来るよ。」

そう言いつと、博士は二階へと上がって行った。

まるで、灰原の追求から逃れるようだった。

（博士…、何か隠しているのね。）

妙に慌てている博士を見て、灰原は思った。

何か言えない事実があったのは、この時点ではほぼ確定している。

（にしても、一体何があったのかしら…。）

家の戸締まりをしながら考えていたが、結局博士が何を隠しているかは分からなかった。

ただ一つ言えるのは、コナンは間違い無く生きているという事だけ。それは確定している。だから、希望を捨てるにはまだ早かった。

「博士、まだ用意出来ないの？」

未だにリビングで何かを探している博士を、灰原は急かす。

「いや…、家の鍵が見付からなくて。」

引き出しの中をガサガサと探しながら、博士は困った表情で言う。

「そんなの良いわ！早く行きましよう。」

「じゃが、また奴らが来たらどうするんじゃ？」

博士は、また組織の手が灰原に及ばないか心配していた。

「無駄よ。奴らに防犯対策はナンセンス…意味が無いわ。」

組織の手口を知っているだけあって、戸締まりが無駄だと気付いていた。

そして二人は、戸締まりをせずに外へ停めてある車に向かった。

「いやゝ、今日も外は暖かいのう。」

博士は、小さく背伸びをしながら言った。

春という事もあり、外は柔らかく暖かい風が吹いている。

「ええ、たまには外に出るのも良いわね。」

太陽の日差しを手で遮りながら、灰原も一時の解放感に浸っていた。

「じゃ、行くかの。」

「ええ。」

二人は車に乗り、エンジンを掛けると、病院へ向けて出発した。

暗い気分も少し晴れ、阿笠博士もさっきの様に動揺はしていない。

灰原自身も、その事を咎める気は無かった。

「大体、あと五分位で着くかのう。」

車の時計を見ながら、博士は言う。

すぐ近所にある大きな病院なので、そんなに時間はかからない。

「でも…、組織の手に落ちて助かった事は奇跡に近いと思うわ。」

外を眺めながら、灰原はぼつりと呟く。

「そうじゃな！助かって良かったわい。」

博士も、嬉しそうな表情をしていた。

やがて、目的地である病院が見えて来た。

駐車場には、平日のせいか露骨に空車が目立っている。

適当な場所に車を停めると、二人はドアを開けて車を降りた。

駐車場から病院までの道はそれほど長くないにも関わらず、二人に取っては、長い時を経て辿り着いた様な気がした。

それほど、二人の関心は入院しているコナンに向けられていた。

「すいません、江戸川コナンの病室は……。」

病院内に入り窓口に向かうと、博士は再確認の意味でもう一度訪ねる。

事前に部屋番号は教えられていたのだが、動揺していたため曖昧にしか覚えていなかった。

「江戸川様は……、401号室になりますね。」

束になっていた書類の一枚を眺めた後で、受け付け係は静かに言った。

「えっと、401は……四階じゃな。」

エレベーターの近くにあつた案内図を見ながら、博士は独り言を呟く。

「博士、エレベーター来てるわよ?」

案内番を見る事に夢中になっている博士は、

エレベーターのドアが開いている事に、気付いていない。

「おお、すまんすまん!今行くよ。」

博士が急いでエレベーターへと乗り込んだ直後、ドアが閉まった。

それを見ながら、博士はギリギリセーフといった表情を浮かべている。

(やれやれ……まるで緊張感が無いんだから。)

これからコナンと対面すると言うのに、余裕

すら見せる博士の落ち着き様は相当な物だと、灰原は思った。

やがてエレベーターが止まり、四階のフロアがドアの向こう側に現れた。

廊下は、現在地を中心に左右へと分かれており、401号室はその右側にあつた。

「ここね……江戸川君がいるのは。」

二人は今、コナンがいる病室の扉のすぐ前に立っている。

博士から見れば、何の変哲も無い普通の

ドアだが、小学生の灰原からすればとても大きな壁の様に感じられた。

例えるなら、自分とコナンの対面を遮る境界線

の様に見えていたかもしれない。

（入りたい…。入ってすぐに会いたいけど

彼に会ったら何て言えば良いのかしら…？）

灰原は、そんな事を考えていた。

コナンがこんな目に合ったのも、全て自分の責任だと感じていたのだ。

自分さえ組織に尾行されなければ、こんな事は起こらなかった…。

自責の念が、灰原の感情を支配していた。

しかし、そんな灰原をよそに博士はゆっくりと扉を開く。

「あつ…」

目の前の光景にはっとして、灰原は現実の世界へ引き戻された。

ギィイ、と音を立てて扉は開いて行く。

次の瞬間、二人の目に飛び込んで来たものは、酸素マスクをしながらベッドに身を委ねているコナンの姿だった。

第九章：夢と現実の違い（後書き）

終わった…ここまで書けるとは思わなかった。これから暫く、小説は更新しないかもしれません…読者の皆様、申し訳無いです。待つ人は、どうぞ気長に待っていて下さい。（未完になりそうです…）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1122a/>

記憶の断片

2010年10月15日20時58分発行